浅草寺の大提灯

志ん橋大提灯

雷門大提灯

小舟町大提灯

京都の高橋堤燈株式会社が制作
鳥取県の伝統工芸品である因州和紙(いんしゅうわし)使用
雷門大提灯が有名であるが、浅草寺で一番大きいのは本堂の志ん橋大提灯である。

浅草寺本堂　　１１．６尺　３５０×４５０「横（直径）×縦）

本堂（観音堂）に**「志ん橋」**大提灯は掛っており、
この志ん橋大提灯も、新橋の方々からの奉納提灯で、平成 16 年 12 月に制作し寄進されました。
江戸時代の浮世絵師・広重「浮絵浅草寺雷門之図」には、新橋から奉納された、「志ん橋」大提灯が描かれています。現在、本堂に掛かっている「志ん橋」大提灯は広重の浮世絵に描いていたデザインに立ち返っています。

浅草寺雷門　　11 尺　330×390　　（2013 年 11 月 18 日張替修理）

現在の雷門は、昭和三十五年に故松下氏が寄進再建されたもので、本来の風雷神紋は、慶応元年に消失して以後一年ぶりに再建されたものです。
今、つるされている**「雷門」**大提灯は、平成 15 年 8 月に製作し寄進された提灯です。
雷門大提灯は、三社祭の際には神輿が下を通過する為に提灯が持上げられ畳まれます。又、台風や強風時にも破損を防ぐために、三社祭同様に江戸火消しの流れを汲む新門組の手により畳まれます。もともと雷門には大提灯は吊るされておらず、古い写真や絵には出てきません。新しく製作された雷門大提灯は、京都山科工場で生まれますので東京の浅草寺までは、大型専門運送会社に輸送してもらいます。提灯の直径が大きい為、高速道路が使用出来ないので一般道で夜中走行のみで、京都から東京まで二泊三日の長い旅です。

浅草寺宝蔵門　　9 尺　２７０×３８０

雷門大提灯と志ん橋大提灯（本堂）との間に、**「小舟町」**大提灯が宝蔵門に掛っています。
この小舟町大提灯も、小舟町の方々からの奉納提灯で、平成 15 年 10 月に制作し寄進された提灯です。（日本橋小舟町）こぶなちょう
宝蔵門は、当初は仁王像を納めていた事から仁王門と云われていたが、浅草寺の宝物収蔵庫の為に宝蔵門と呼ばれるようになました。宝蔵門は、昭和 20 年の東京大空襲で焼失し、後の昭和 39 年ホテル・オータニの創業者　大谷米太郎氏により寄進再建されたものです。宝蔵門の裏側には、「浅草名物」の仁王様の履いたと言われる「大わらじ」が掛られおり、その「大わらじ」の大きさは、長さ 4m・巾 1.5m・重さ 500?　と「浅草名物」に相応しい大きさです
約３４０年前、同町の魚河岸商人の信徒らが提灯を奉納したのがきっかけとなり同町で受け継がれている。

浅草寺二天門　　７尺　２１０×２５０

二天門は浅草寺鳥居横の東側に位置し、江戸時代東照宮の随身門であったが、明治維新の神仏分離令により二天門と呼ばれ、周辺の数回にわたる戦災をまぬがれ重要文化財に指定されています。
花街の人々が中心の東京浅草組合が寄贈された、**「二天門」**大提灯が掛けられています。
雷門や宝蔵門に比べると大きさには欠けますが、長年の間、火災や戦災からも免れてきた歴史的な重厚さが感じられます。
平成２２年４月に解体され大修理を終えています。

「雷門」・「志ん橋」・「小舟町」・「二天門」の大提灯全ての底には、龍の彫り物が一枚板に彫刻されており、龍の彫物は、木彫師　渡辺崇雲氏の制作によるものです。

雷　門

天慶５年（942）平公雅（たいらのきんまさ）によって創建され、その初めは駒形付近にあった。
鎌倉時代以降現在地に移築された際、風神・雷神が初めて奉安されたといわれる。
当初は、伽藍守護のために、風水害または火災からの除難を目的としてこの二神がまつられたもので、一種の護法善神（ごほうぜんしん）と見るべきものであったが、さらには、風雨順時の天下泰平、五穀豊穣の祈願もこめられるようになったものと推測される。
現在の門は、慶応元年（1865）１２月１２日の田原町大火で炎上した門に替わり、昭和３５年（1960）、９５年ぶりに松下電器創始者松下幸之助氏のご寄進により、復興再建され、浅草寺の総門として威容を誇っている。